

「しるしを欲しがる」

2014年09月13日

マルコによる福音書8章11節～13節。ファリサイ派の人々が来て、イエスを試そうとして、天からのしるしを求め、議論をしかけた。イエスは、心の中で深く嘆いて言われた。「どうして、今の時代の者たちはしるしを欲しがるのだろうか。はっきり言うておく。今の時代の者たちには、決してしるしは与えられない。」そして、彼らをそのままにして、また舟に乗って向こう岸へ行かれた。

ファリサイ派は紀元前2世紀頃、民衆の宗教教育を目指して作られた宗教団体である。民衆を対象にしていたので、民衆の苦しみを知っていた。彼らは天使や復活を信じる教義を取り入れた。天使の保護を信じ、復活に望みを託していた民衆と共にあろうとしたのではない。また、彼らはモーセの十戒を中心とした律法体系を重視した。それは、必然的にローマ支配への反抗という愛国主義的な主張であった。一方、エルサレム神殿の祭儀を司るサドカイ派は保守的で現状を追認する宗教団体であった。彼らは見えない天使や復活の教義を否定し、ローマ支配を容認する立場を取った。両派は「犬猿の仲」であった。

主イエスは、両派に対して批判をしている。殊に、ファリサイ派との対立が福音書には多く書かれている。彼らは民衆と共にあろうとしたが、律法遵守を強要する権威主義、形式主義に墮し、民衆に重荷を負わせている状況に、主イエスは激しく抗議している。

上記の聖句の出来事は、民衆の主イエスへの支持と尊敬が高まっているのに、ファリサイ派の権威が失墜していることにいらだった彼らが、主イエスを陥れようとして議論を吹っかけてきた時のことを記している。天からのしるし、神にしかできない奇跡を示してみよと迫った。主イエスは、彼らのいらだちと怒りをご承知である。「どうして、今の時代の者たちはしるしを欲しがるのだろうか。はっきり言うておく。今の時代の者たちには、決してしるしは与えられない」と答え、彼らを残し、舟に乗って向こう岸に行かれた。

ファリサイ派の人々との「しるし」論争を無益として立ち去ったと伝えている。ここで主イエスは、しるしは与えられないと言っている。今まで、多くのしるしを示してきたが、それらはしるしでないと言っようように聞こえる。「あっと驚く」しるしを欲するのは世の常である。そして、苦難を負って苦しむ人ほどしるしを欲しがる。

8月に「世界の戦争」というテレビの特集番組を観た。知性と理性を誇るドイツ人がナチズムになだれ込む状況を理解しかねていたが、第一次大戦後の精神的、経済的苦境の中で、ヒットラーに「あっと驚く」しるしを見たいと欲したからではないかと思った。しるしを欲しがるには病んだ心がある。将来への希望は今を立ち上がらせるが、しるしの欲求は今を捨て、架空の夢に誘う。

主イエスは、しるしは与えられないと言う。しるしがないことは、神が不在なのではない。神は厳然とおられ、確かな守りと祝福がある。主イエスは、その信仰に立って、あの苦難を乗り越えられたと理解すると、納得がいく。

マタイ福音書の並行記事には「よこしまで神に背いた時代の者たちはしるしを欲しがるが、ヨナのしるしのほかに、しるしは与えられない」と書いている。ヨナのしるしとは、主イエスの十字架の死と復活の命を指している。私たちに与えられるしるしは、罪が赦され、神と共にある「救い」である。